

モデル
「構造構成的質的心理学」の構築
— モデル構成的現場心理学の発展的継承

西條剛央 早稲田大学人間科学研究科 日本学術振興会特別研究員
Takeo Saijo Graduate School of Human Sciences, Waseda University
Research Fellowships of the Japan Society for the Promotion of Science

要約

この論文の目的は、質的な方法論「モデル構成的現場心理学」の理論的基盤を整備することであった。第一に、客観主義に依拠する数量的アプローチと、社会構築主義に依拠する質的アプローチを包括する認識論的基盤を整備した。第二に、「構造」、「モデル」といった方法論的概念について検討した。第三に、評価基準として、「信憑性」と「構造化に至る軌跡」が重要であることが示された。第四に、新たな一般化の枠組みとして、アナロジー的思考に依拠した一般化の枠組みが提唱された。最後に、本稿で体系化された理論が「^{モデル}構造構成的質的心理学」として提起された。

キーワード

構造構築主義, モデル, 信憑性, アナロジー的思考に基づく一般化, 質的アプローチ

Title

Construction of "Structure-Construction Qualitative Psychology": Succession of "Model-Construction Field Psychology"

Abstract

The purpose of this study was to restructure what is known as "field psychology based on model construction." First, the epistemology that comprehends objectivist quantitative approaches and social constructionist qualitative approaches was advanced. Second, the concepts of "structure" and "model" were reconsidered. Third, two core concepts for evaluation, "trustworthiness" and "construction trail" were proposed. Fourth, a new framework for "generalization based on analogy" was suggested. The theory discussed and formulated in this paper was named "structure-construction qualitative psychology."

Key words

structural constructivism, model, trustworthiness, generalization based on analogy, qualitative approach.

序章

現在、質的研究は我が国の心理学にも着実に浸透しつつあり、実際に、いくつかの心理学のメジャー・ジャーナルにも散見されるようになってきた。また、我が国における最大規模の心理系学会の一つである「日本心理学会」で、1994年～2002年の間に、「定性的研究の実際」を副題とした研究が94本発表されていることにも、その一端が現れている。しかし、それと同時に玉石混淆の様相を呈しつつあり（無藤，2002）、様々な問題・混乱が渦巻いている状況にある。

無藤（2002）は、本誌創刊の理由の一つに、この玉石混淆の状況の打開を挙げている。「建設的ながらも厳しいコメントによる磨き合い」が可能な、本誌のような「多くの人に開かれた場」が査読付きジャーナルという形で実現したことは、この打開の糸口になるに違いない。しかし、開かれた研鑽の場を整備しても、評価基準を中心とした理論的基盤が確立されていなければ、それはルールを定めずに、人が集まり漠然と運動するようなものであり、本当の意味で「建設的な磨き合い」をすることは困難だろう。実際、各学会などでも「おもしろい」「おもしろくない」程度の評価が飛び交い、非本質的な議論に終始し、必ずしも議論されるべき点が議論されているようには思われない。したがって、玉石混淆の状況を打開し、質的研究を職人芸で終わらせないためにも、質的心理学を基礎付け、評価基準を確立する必要があるといえるだろう。

用語の確認

質的研究とは何か？

まず、「質的研究」と、本誌の題名にもある「質的心理学」といった用語について整理する。質的研究の定義を考える際に、本稿ではFlickの著書（1995/2002）とHollowayとWheelerの著書（1996/2000）の2つの論考を踏まえ論じることとする。というのは、これらはその背景にある哲学的議論を踏まえており、Melia（1996/2000）がいうように「そのような検討を省略して単純化するあまり、最後には役に立たない方法し

か載っていないテキストとは違い、妥当な見解を示していると思われるからだ。

質的研究に対する、第一の共通見解として「内的視点（emic perspective）」を持つということが挙げられる。それは「その環境の中で生きている内部者の視点をもつ」（Holloway & Wheeler, 1996/2000）ことであり、「研究される現象や出来事を内側から理解する」（Flick, 1995/2002）ということである。

第二の共通見解として、社会構築主義的な認識論を挙げることができるだろう。HollowayとWheeler（1996/2000）は、「質的研究は、知識が社会的に構築されるという信念に基づいている」と言及しており、Flick（1995/2002）も「質的研究で研究される現実とは所与の現実ではなくて、さまざまな『行為者actor』によって構築された現実なのである」と述べている。この要諦は、浅野（2001）の挙げている「現実^{よそよそ}は客観的に存在するのではなく、言語をなかだちにした人々の行為を通して構成される」といった社会構築主義（social constructionism）⁽¹⁾の共通点と重複することがわかるだろう。したがって、本稿では、質的研究の認識論的前提を、「ある事象Xは客観的実在というより、言語を媒介として個人や社会によって構成されたものとして捉える」といった社会構築主義的な認識形式としておく⁽²⁾。

以上2点の共通点から、本稿でいう「質的研究」とは、「社会構築主義的認識形式を前提とし、現象をシステムの内側から構成されるものとして捉えようとする研究の総称」として議論を進める。なお、この定義に基づけば、「質的研究法」や「質的アプローチ」とは、「社会構築主義的認識形式を前提とし、現象をシステムの内側から構成されるものとして捉えようとする研究法（アプローチ）の総称」ということになる。

質的心理学とは何か？

次に「質的心理学」について確認する。現在のところ心理学辞典（中島，1999）に「質的心理学」という記載はないことからわかるように、この用語は、心理学カルチャー全体に共通了解されていない。また、本誌の投稿規定にも、「本雑誌は、心理学およびその周辺領域における質的研究を掲載し、その発展を計るものである」といった記載はあるものの、「質的心理学

学」に関する何らかの定義はなされておらず、「心理学コミュニティ内で行われた質的研究」程度の意味で使われているようである。その定義が為されていない現在、「質的心理学」というコトバを中心に据えて議論することは、避ける必要があろう。むしろ本稿の議論を通して「質的心理学」の定義を浮かび上がらせることができればと思っている。

モデル構成的現場心理学

質的研究の評価基準といった問題を考えていく際には、やまだ(1997; 初出は1986)の提起した「モデル構成的現場心理学」に焦点化して議論を進めるのが適切と考える。なぜなら佐藤(2002b)が述べているように、「この論文は、多くの人から参照・引用され大きな影響をもっている」からだ。またその影響力の大きさは、小田(2002)が我が国の質的研究の歴史を概観する中で、「心理学では『現場(フィールド)心理学』の名の下に質的研究を統合しようとする動きがみられた(やまだ1997)」と言及しているように、心理学領域外からもその動向が認められていることにも現れている。したがって、まずモデル構成的現場心理学の意義と問題点を概観していくこととする。

やまだ(1997)によれば、モデル構成的現場心理学とは、『モデル構成』のために、研究の場『現場』で研究する心理学」と定義される方法論である。また最近では、やまだ(2002b)はモデル構成的現場心理学の特徴を次のように言及している。

モデル構成的現場心理学は、まず私たちが生きている日常生活のローカルな現場を研究の土台として、その現場から問題や方法を立ち上げてモデルを作り、より多くの場や文化において共有できるように一般化していくことを目指している。

筆者の見解からすると、モデル構成的現場心理学の意義は以下の3点に集約されるように思われる。第一に、心理学に普及しているコトバ(概念・文献)を用いて独自の方法論を構築した点にあるといえる。これによって、多くの心理学者に質的研究が浸透したという意味で評価されるべきだろう。

第二の意義として、モデル構成を方法論の中核に据えたことが挙げられる。なぜなら、これによって(1)曖昧な記述に終止しかねない質的研究に「モデル」という検討可能な実体を与え、(2)個性記述で終わりがねない質的研究を、モデルに基づき一般化を目指すものとして位置付けることが可能となったからである。

第三の意義として、日本で構築された方法論であることが挙げられる。我が国の心理学における方法論は輸入物により占められており、独自のものがほとんどみられないことを鑑みれば、この意義は従来認められてきた以上に大きいといわなくてはならない。そして、この方法論を発展させることにより、日本独自の理論が構築され、将来的に世界の質的研究に貢献する可能性が生まれたのである。

モデル構成的現場心理学の発展的継承

やまだ(1995)は、日本の研究に独創性が少ないという見方はあたっておらず、本当に足りないのは、独創的な芽を評価したり批判したりしながら、長期にわたって発展させたり育てていく土壌がないことではないかと述べている。この提言を踏まえ、モデル構成的現場心理学を理論的に補強・修正することによって、新たな理論的枠組みとして世界の質的研究に貢献するために、その理論化を進める。

それではどのような側面を補強すべきなのだろうか。まずモデル構成的現場心理学においては、哲学的基礎付けや、認識論的基盤等の理論的枠組みの整備が為されていない点が挙げられる⁽³⁾。「質的研究法が生まれた社会学と人類学の分野では認識論についての精緻な問題がよく理解されていたのに、ほかの領域ではしばしば理解されていない」(Melia, 1996)との指摘があるように、認識論的基盤の構築は極めて重要な作業となる。なぜなら「どのような前提に立って現象にアプローチするか」といった認識論的基盤を確立しておかなければ、その枠組みの中で妥当な知見とは何かといった評価基準(方向性)を定めることが困難になってしまうからだ。

また、方法論と認識論は本来切り離せない関係にあることから、確立された認識論的枠組みに応じて、モ

デル構成的現場心理学の中心概念である「モデル」についても検討し、必要に応じて修正を加える必要がある。さらに、質的研究に関する評価基準等については、欧米の方が先んじていることから、欧米で為された議論を踏まえつつ論じる。

本稿の目的

以上をまとめると、本稿の目的は、我が国の心理学における質的研究の玉石混交の状況を打開するために、モデル構成的現場心理学（やまだ，1997）を継承し、その認識論的基盤を整備し、モデルや評価基準、一般化といった方法論的枠組みを洗練し、体系化された「理論」へと発展させることにある。

ただし、以下の章では、難解な哲学的議論を全面に出して大所高所から議論するという論法は採らない。心理学という学問の現場で議論されている具体的な問題（ここでは以下に挙げる異領域との差異化の問題⁽⁴⁾）を出発点として、内側から対象に迫る質的アプローチのスタイルを採用する。前者が、研究者が現場上空の俯瞰した視点にある「鳥の視線」といえるのに対し、本稿が採用する後者は、研究者自身が現場そのものの構成員となる（ように研究者が振る舞う）「虫の視線」（矢守，2001）といえるかもしれない。本稿は、一つの具体的問題を出発点として議論を内側から展開し、理論の全貌を浮かび上がらせていくことによって、ともすると机上の空論と批判されかねない（あるいはそのように誤解されかねない）哲学的、方法論的議論を地に足着いたものにし、共通理解が得られやすくなることを期待したものだが、この試験的論考の成否は読者に委ねることになるだろう。

第1章 異領域との差異化の問題

質的心理学を巡る問題の代表的なものとして、その学際的性質に起因する異領域との差異化の問題が挙げられる。例えば伊藤（2001）はエスノエッセイ、ビジュアルエスノグラフィなどを新たな心理学的技法として提案している。そして自ら「テレビ番組の優れたド

キュメンタリーとどのように差異化を図っていくのかという問題」を挙げ、「ドキュメンタリーそのものを目指すとしたら、勝負は目に見えている」ことを認めながらも、心理学者のフィールドワークは、人間関係により敏感な「関係のエキスパート」である点が、文化人類学者や社会学者のフィールドワークと異なる主張している。

しかし、いくら人間関係により敏感な「関係のエキスパート」を自称しても、人間関係や心理描写という点では、それらに焦点化した優れたドキュメンタリーにかなうべくもないだろう。また文化人類学者が、人間関係に焦点化しアプローチした研究と比較することを想定すると、心理学者が、文化人類学といった長い間洗練されてきた技法を持つ学問体系より、より上手く現象を記述することは容易なことではないだろう。むしろ、このような新たな試みを探索する志向性は高く評価されるべきであるが、これらの冒険的試みによって、「(質的)心理学がいかにドキュメンタリーや文化人類学といった異領域と差異化を計り、その学問としてのアイデンティティを確立すればよいのか」という新たな課題が浮上してきたのである。

一方で「そもそも心理学を異領域と差異化する必要など全くない」という主張もあり得るだろう。それでは、質的心理学として、この主張は妥当なものか検討してみよう。サトウ（2002a）は、教育心理学における不毛性の打開を志向する議論の中で、モード論（Gibbons, 1994/1997）を引き合いに出しつつ、学融（trans-disciplinarity）の重要性を強調している。モードⅠとは、学範内の興味に基づく知識生産であり、モードⅡとは、社会の関心に基づく知識生産である。ここでは〈研究／実践〉という二分法ではなく、研究も実践も知識生産という意味で等価であることが強調されている。そして、学融のイメージとは、社会で生起する問題解決に対する複数の立場の人々が、表面的に野「合」するのではなく、徹底的に議論した上で融和するというものになる（サトウ，2002a）。

したがって、異なる学範に依拠する人々が、それぞれの学範（立場）のアイデンティティを確立した上で学融的になるべきだ（サトウ，2002a）と主張している⁽⁵⁾。「現場心理学」という名称に端的に現れているように、程度の差こそあれ、質的心理学は研究フィー

ルドという意味でも、研究結果を還元するという意味でも、「現場」を重視・尊重する立場を採っているといえるだろう。したがって、現場で研究を行ない、異領域の人々と学融する形で現場に貢献するためにも、先ほど挙げた「そもそも異領域と差異化する必要はない」という主張は妥当なものとはいえないことがわかる。これから、心理学がドキュメンタリーや文化人類学との一線を画し、その学問としてのアイデンティティを確立する必要があるといえよう。

実は、既にそのような論考は一部で行なわれてきた。例えば、南(1991)は、「文化誌(ethnography)を紀行文から区別し、研究論文をエッセイから区別するのは、事実認識と解釈の妥当性に対する方法論的な厳密性(rigour)への高さにある」と述べている。そして、「厚い記述」(Geertz, 1973/1987)によって、相互主観的に現象領域に接近し、妥当性の高い記述や解釈を行なうことに代表されるように、代替的な解釈や批判に対して「開かれている」、そして共同的な認識作業を可能とする資料(データ)が、提示されていることこそが、質的分析における厳密性・妥当性の基本条件であるとしている(南, 1991)。

これは異領域との差異化という問題の要諦を押さえた優れた論考だと思われる。しかし、一方で、ナラティブアプローチ⁽⁶⁾の台頭(やまだ, 2000a, 2000b)により、差異化すべき対象は、ドキュメンタリーや文化人類学のみならず、小説や詩をはじめとする文学作品、さらには映画といったサブカルチャーにまで拡張されてきた。なぜなら、ナラティブアプローチは、フィクションか事実か、芸術的か科学的かを区別しないというラディカルな立場を採る(やまだ, 2000a, 2000b)ためである。そして、実際、文学作品、映画、漫画といったサブカルチャーに到る広範な範囲のテキストに基づき心理現象にアプローチするやまだ(2002a)や西條(2002a)の研究を巡って現在様々な問題点が指摘されている⁽⁴⁾。したがって、ラディカルなナラティブアプローチを基軸に、異領域との差異化という問題を改めて検討していくこととする。

第2章 質的心理学をも包括する「科学性」の構築

2-1. 質的研究における3つの態度

サトウ(2002a)は、教育関連に議論を焦点化しながら、心理学の特徴とは広義の「実証性」にあり、このように学範全体で広義の実証性を志向する性質は、他の教育関連諸学にはあまりみられないと述べている。したがって、質的研究の中でもラディカルな、ナラティブ研究(西條, 2002a)においても、広義の実証性を持つ、「科学的」研究であることを示すことができれば、異領域との差異化という当面の課題は達成できると考えられる。

その際に、大きく3つの方向性が考えられる。第一に、いわゆる客観科学における「科学性」に、質的研究を閉じ込めることである。しかし、渡邊(2000)が主張したように、心は、誰からでも見えるという特徴を持っていない。すなわち、心的現象には曖昧な側面が多分に含まれているにもかかわらず、「科学的」心理学が、心的概念を科学的概念と取り違えて、それを客観的に取り扱うためのひねくれた方法を百年に渡って編み出し続けたことが問題であることは、既に指摘されている(渡邊, 1997)通りであることから、この方法は適切ではないだろう。

第二に、科学性は放棄し、質的研究のカルチャーのみで通用する枠組みを独自に創ってしまうことが考えられる。この方法は従来の質的研究において実際に行なわれて来たことである。例えば、やまだ(2002b)は、Bruner(1986/1998)をはじめとするナラティブ研究者と同様に、数学的論理や命題的論理を支える論理実証モードと物語モードを明確に区別し、論理実証モードと物語モードは片方が片方に還元することはできないとし、その基盤の確立を試みている。

しかし、その一方でこのような二者択一ではなく、数量的研究と質的研究は柔軟に使い分けるべきだという融和論とでもいえるべき立場もある。Bryman(1988)やSilverman(1993)は、そのアプローチは研究者の意図と目的によって決まるのであり、どちらか一方が優れたアプローチということではないし、また双方の対立を強調しても、有効な議論にはつながら

ないと強調している。また、モデル構成的現場心理学（やまだ，1997）においても、「数量的データとの効果的な組み合わせが考えられねばならない」といった立場が採られている。

2-2. 融和論の問題点

この融和論ともいえる見解は、その方向性としては妥当なものと思われる。しかし、事はそう簡単ではない。Holloway と Wheeler (1996/2000) は、それらを踏まえながらも、「にもかかわらず、社会科学の実証主義的方法と解釈的方法は、対抗しかつ対立した思想がその根源にあるということを思い出さなければならぬ」と述べているように、これら2つの方法論は、異なる認識論に依拠しているため、両者は相容れないものであり、相互に排他的なものである (Hammersley, 1992) ことを忘れてはならない。客観主義（実証主義）は、個人の外部に、個人とは独立した実在があるという信念に基づいている一方で、社会構築主義（解釈的立場）に依拠する者は、現実¹は社会的に構築されており、それゆえ観察者によって構築されると主張しているのである。このように相容れない認識論に依拠する方法論を、1つの研究において柔軟に折衷することは理論的に無理がある（菅村・春木，2001）。またそれ故に、相容れない認識論から生み出された知見を摺り合わせることも無理があることになる。これは例えるならば、対立している2人の歴史的背景やそれまでの経緯を考慮せずに、根本的問題を解決することなく「お互い仲良く手を組み、協力しあうべきだ」と主張する楽観的態度と同じで、実質的にはほとんど意味をなさないだろう。融和論は、確かに「正論」であるのだが、認識論的問題を解決できていない現状においては、残念ながら「不正解」といわざるを得ないのである。したがって、従来の心理学が客観主義、社会構築主義といった相容れない哲学的前提を根底とする限り、融和論は楽観的折衷主義の域を出ることはないだろう。

2-3. トライアンギュレーションの問題点

このことは「トライアンギュレーション」という方

法論的概念の問題にもかかわってくる。トライアンギュレーションとは「1つの現象に関する研究で複数の方法（または複数のデータ源、複数の理論、複数の研究者）を用いる」（Holloway & Wheeler, 1996/2000）というものである。Denzin (1989) は、トライアンギュレーションを、「データ」、「研究者」、「理論」、「方法論」といった4つの代表的なタイプに分類している。しかし、認識論的な視点から分類するならば、これらの分類は表面的なものに過ぎず、認識論内トライアンギュレーションと、認識論間トライアンギュレーションといった分類が重要な意味を持つことになり、ここでは後者において問題になる。Flick (1995/2002) は、異なる認識論に依拠する質的・量的研究を組み合わせることによって、以下の3つの帰結に至るとしている。

- (1) 質的結果と量的結果がひとつに収束し、互いに強め合い、同じ結論を支持する。
- (2) 両結果はひとつの対象（たとえば特定の病気の主観的意味と住民との間でのその分布）の異なる側面に焦点を当てるが、互いに補い合うもので、合わさることで全体像がはっきりする
- (3) 両結果は互いに異なり矛盾する。

異なる認識論的前提からアプローチした場合、(1)(2)のように矛盾のない結果が得られた時には問題は隠蔽されるが、(3)のように相矛盾する結果が得られた場合に、その限界が顕在化する。そのような場合、どちらの結果が妥当であるかを、どちらかの認識論的前提を中軸に据えることによって、決めねばならず、換言すればそれはどちらかの結果妥当性を低めることを意味する。これではトライアンギュレーションの有効性は十分に発揮されることはないだろう。これはデータ、研究者、方法論、理論のいずれも問わず、相容れない認識論に基づくトライアンギュレーションが抱える根本的な難問²なのである。

もともと、こういった指摘に対して、以下のように、トライアンギュレーションと単なる折衷主義との差異を、「問題解決への焦点化」に求めることは可能かもしれない。

データのトライアングレーションは、方法の混合とは異なっている。トライアングレーションにおいて、研究者は同じ問題に異なった方法で、あるいは異なった見地からアプローチする。研究者が方法を混合する場合は、異なったアプローチ法を用いながら、1つの研究のなかで異なった研究問題をみている。

(Holloway & Wheeler, 1996/2000)

しかしながら、このような主張も根本的な解決をもたらすものではない。なぜなら、対象に異なる視点からアプローチしたならば、結果的に1つの研究の中で「異なった研究課題を見て」しまう可能性は常に排除できないからだ。1つの研究課題に対して異なった理論的見方を適用する理論的トライアングレーションの使用頻度が低い(Holloway & Wheeler, 1996/2000)のは当然の帰結なのである。以上のことから、トライアングレーションの真価を発揮するためにも、認識論の問題を解決する必要があることがわかるだろう。

2-4. 難問の突破口

したがって、Flick (1995/2002)の「結果の適切な評価のあり方の点で、2つの研究法には相変わらず違いがある。このような違いをどう考慮に入れて、両研究戦略を組み合わせるかという問題はさらに議論される必要がある」といった見解は妥当なものといえよう。現在求められることは、認識論の問題に正面から取り組むことだと考える。その際に重要なことは、原理的思考を徹底することにより、論理実証モードと物語モードの還元不可能性を認めつつも、それと包括不可能性は別種の問題であり、還元できなくとも、それらを包括する基盤を創ることは可能であることにまで思考を押し進めることだ。論理実証モードと物語モードが「相補的」(Bruner, 1986/1998)であるためにも、それらを包括する枠組み(基盤)を創造することは必要不可欠といえよう。また、それによって初めて「質と量を単に折衷するのではなく、両方の長所を『むすぶ』」(やまだ, 2002c)ことも可能となるのである。

次に、そのような包括的枠組みを整備するにあたり、その科学性をどのような戦略に基づき確立していくべきかを検討するために、(質的)心理学を「基礎付け

る作業」(西, 2001)に立ち戻り、(質的)心理学の対象領域の特質を解明していくことにしよう。学問の哲学的基礎付けとは、それぞれの学問の営みの「意味」をより深く理解することである(西, 2001)。意識体験という方法は、それぞれの学問の営みの中に入り込み、その営みのあり方を反省的に解明することによって、それがどのような前提の基に成り立っているのか、そこでの対象領域の特質、またそこでの真理性は何を意味するのか等を解明することであり、そのような理解が染み通っていけば学問相互の連関も深く理解されてくる(西, 2001)。

2-5. 「心」の性質再考

それでは、心理学が対象とする「心」とはどのような性質のものか、換言すれば、我々の心に立ち現れる現象とはどのようなものだろうか。例えば、今この論文を読んでいるわけだが、この論文が在るか無いかといったことに関しては、一致した共通理解が得られると思われる。自分が今、目にしている紙やインクについて、隣の人が「そんなものは無い」ということはほとんど起こり得ない。しかし、この論文の「意味」や「価値」といったものに関してはどうだろうか。自分にとってはある程度意味や価値のあるものを感じられたとしても、隣の人にとってはほとんど意味や価値があるものを感じられないことは十分あり得ることであり、むしろそれに対して一致した見解を持つ方が稀な事態といってもいいだろう。前者は、我々に立ち現れる現象の「確実な側面」といえ、後者は現象の「曖昧な側面」ということができ、我々の認識にはこのような確実な側面と曖昧な側面が同居しているのである(竹田, 1989)。

以上のことから、このような性質を持つ「心」を対象とする心理学にとって、現象を確実なものとして捉える客観主義的認識論では不十分だし、現象を曖昧なものとして捉えるだけでもまた不十分であることが解るだろう。それでは、人間の事象の中でも、確実な側面と曖昧な側面を合わせ持つ「心」という現象に対し、戦略的にどのようにアプローチすれば良いのだろうか? 従来の科学は、素朴に、外部に1つの客観的世界が実在するという客観主義的前提に基づき、検証、

要素還元等を繰り返すことにより、いつかその客観的実在に到達することができると考えた。現象の確実なる側面（いわゆる外部実在）にアプローチする物理学に代表されるような客観科学において、このような前提はそれほど問題を起すことなく機能したといえる。しかし、心理学において1つの外部客観を仮定するこの前提は、致命的な欠陥を抱えることになる。なぜなら、心理学的現象は、曖昧な側面を多分に含むのにもかかわらず、その曖昧な側面を原理的に扱えなくなるからである。

したがって、心の曖昧な側面を扱うためには、心理学は戦略的に主観側（曖昧な側面）から出発せざるを得ないのである。しかし、ここで主張していくことは、ポストモダニズムの源流にもなった、Derrida（1967/1972）の「解釈の戯れ」などという最終的には相対主義に陥ってしまう類いのものではない。そうではなく、心の曖昧な側面を扱うために戦略的に曖昧な側面から「出発」するが、曖昧なものの積み重ねのなかで、結果的には確実な側面、すなわち外部実在のような高い共通理解を得られる側面をも扱えるものがある必要がある。本稿では、これらの条件を満たす認識論的枠組みとして、構造主義科学論（池田，1990）を援用することとする。

2-6. 構造主義科学論（池田，1990）

構造主義科学論とは、客観的外部実在を仮定せずとも、疑っても疑うことができない「私」、その私に立ち現れる「現象」（経験それ自体）、そして私の考える「観念（同一性・コトバ）⁽⁷⁾」といった3つの前提から、科学的営為が可能であることを「解明」したものである⁽⁸⁾。

原理上、記号と記号の関係形式は、誰にとっても理解可能かつ客観的なものであり、この「記号と記号の関係形式に、コトバの形で表記されている同一性を代入したもの」は、通常「構造」と呼ばれる。コトバは一回起性の現象のみをコードせずに、必ず複数の現象をコードする。例えば、「犬」は目の前にいる犬ばかりでなく、昨日見た犬も、明日見る犬もコードする。したがって、コトバとコトバの関係形式である構造もまた一回起性の現象のみでなく、複数の現象をコード

する。この中には未来の現象も含まれ得るため、構造は未来の現象を予測可能とする。

そして、一回起性の現象は時と場所を全く同じくして再現することは不可能であることから、現象の再現可能性は、結局その現象に関する構造が記述できるかどうかによってくる。したがって、構造を記述できれば、構造がコードする現象を作り出すことは原理的には不可能でなくなるため、予測可能性も再現可能性も保証されることになる。

二者間で科学理論が共通理解可能になるためには、必ずしも理論構造に含まれるコトバの同一性が共通である必要はなく、構造の形式が同じであればよい。すなわち、現象からコトバの同一性を引き出すやり方が同型ならば、私の「現象→コトバの同一性」とあなたの「現象→コトバの同一性」の間には完全な平行性が成立し、この平行性はコトバのシニフィアン⁽⁷⁾ ^{参照}の同一性に支えられて完全な共通理解可能性を持ち得る。したがって、私が私の現象についてあなたと話した場合に、モノ自体が同じであるという前提を置かなくとも、話をしている間に、あなたと私は同じ現象について語れている確信は深まっていくという事態が起こるのである。

したがって、科学とは「単語の形でしか形式化されていない同一性」を「明示的な関係形式の記号部」に「内容（同一性）を代入する」ことによって、「構造」に変換する試みということになり、それによって再現可能性、予測可能性を保証することが可能となる。すなわち、科学とは構造を記述することであり、より上手に現象を説明できる理論（構造）が、より有効な理論（構造）ということになる。

2-7. 認識論的基盤としての構造構成主義

以上が構造主義科学論（池田，1990）の要諦である。この頑健な科学論を、客観主義、社会構築主義といった相容れない認識論の一段上位に超認識論として位置づけることによって、人間科学を包括する認識論的基盤を創った西條の論考（2002b）に倣い、ここでもこの超認識論を認識論的基盤として採用する。なお、構造主義科学論は、構成主義（constructivism）との類似点も多く、構造主義と構成主義の優れた点が融合した

「構造構成主義」ということができる(西條, 2002b)。したがって、科学論であった構造主義科学論は、超認識論としての認識論的基盤となったことから、これを「構造構成主義」(structural constructivism)と呼ぶこととする。これによって曖昧な(主観的)側面と確実な(客観的)側面を一元的に扱うことが可能な認識論的基盤が整った。

2-8. 知見構築の方法論的枠組みの必要性

しかしながら、これだけでは「科学性」を保証するには不十分である。なぜなら、再現可能性、予測可能性は保証できたが、質的心理学における客観深化(知見の洗練)可能性が満たされていないからである。客観的に深化するためには、研究者間で知見を引き継いでいく枠組みが必要である。しかし、検証とは、客観主義を背景とし、要素還元を基本的手段とする(菅村・春木, 2001)ことから、基本的には対象とした仮説の是非を確かめるために、検定を用い、より細分化した方向へと還元を繰り返し、客観的実在への到達を目指す枠組みといえる(西條, 2002a)。質的研究は、「実証資料としてテキスト」を用い、「テキストが(事例の)再構成と解釈の基礎」(Flick, 1995/2002)とする。そのため、そもそも多様な解釈が可能なテキストを基軸とする質的研究には、「検証」という枠組みは適さないため、独自の枠組みを整備する必要がある。

したがって、ここでは、そのような現状を打開すべく西條(2002a)が提唱した「継承」という方法論的概念を採用する。「継承」とは質的アプローチにも適した知見積み上げの論証法として、研究対象とする現象に応じて、仮説をより細分化・精緻化していく従来の検証の方向性と、記述や解釈の多様性を拡大する発展的・方向性の双方を、柔軟に追求可能な枠組みである⁹⁾。これは「身体・欲望・関心相関的観点(以下、「関心相関性」とする)」(竹田, 1995)を基軸とすることに他ならない。「関心相関性」とは、竹田(1995)が Heidegger の「存在問題」の思想の中核と全体像を明瞭に浮かび上がらせるために採用した Nietzsche の視点である。その視点から「存在」を捉えなおせば、「事物の存在は、根本的には、生き物の

(身体)、(欲望)、(関心)、(配慮)などのあり方と相関的に、そのつどそのつどその『存在性』が規定される」ということになる。これと同じ原理において、継承の精緻化・発展性の方向性やその比率は、研究対象や目的と相関的に決定されることになるのである。

2-9. 「科学的」ナラティブアプローチ

方法論は実際の研究枠組みで使用し、その有効性・実行可能性を確認する必要がある。したがって次に、構造構成主義(構造主義科学論)を認識論的基盤とした上で、先述した「継承」枠組みに依拠することによって、ナラティブアプローチによる心理学的研究も「科学性」を満たすことが可能であることを論証した西條の論考(2002b)をみていく。

やまだの研究(2001a)では、人生の物語論に依拠し、死に直面した人が天気へ言及する可能性を検討することにより「他者の死を見送る時、自己が死ぬ時にかかわらず、生死のぎりぎりの境界で天気の語りが見られるのは、偶然ではなさそうである」といった仮説が提起された。これは、[①親しい他者や自己の死に直面→②天気に言及する]といった「生死の境界における天気の語り」という心理的事象の構造化(発見)を示しているといえる(西條, 2002b)。

西條(2002a)は、この構造仮説を継承し、修正仮説として「親しい他者や自己の死に直面した時、感受性が高まり、死とは対照的な『自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ』を敏感に感じ取り、『自然・天気・季節』に関連づけてそれらに言及される」を提起した。これは「生死の境界における天気の語り」といった心理的事象を[①親しい他者や自己の死に直面→②感受性が高まる→③死とは対照的な『自然現象のうつくしさ・あかるさ・晴れやかさ』を敏感に感じ取る→④『自然・天気・季節』に関連づけてそれらに言及することがある]といった構造へと変換したことを意味する(西條, 2002b)。①の時には、②・③といった動的構造があるために、結果的に④において「天気」には限らず、「自然」や「季節」にも言及されることがあるというような、言及対象の多様性も包括する構造モデルが示されたといえる(西條, 2002b)。

また、ナラティブアプローチにおいても、データの解釈やその妥当性について反証可能性を残すためには、テキストから解釈を導き出すそのプロセスを明示すればよい。もし、あるテキストから妥当性のない解釈を導き出した研究があったならば、それを継承し、そのテキストに対するより妥当な解釈を示すことによって反証可能となる（西條, 2002b）。

このように、心理的現象を構造化し、継承枠組みにより、テキストから解釈を導き出すプロセスを明示することによって、ナラティブアプローチにおいても、予測可能性、再現可能性、反証可能性が保証され、客観性の深化や知見の積み上げといった科学的条件を満たし得ることが示されたといえる。ただし、従来型の枠組みによるナラティブアプローチでは、広義の科学性は保証され得ず、そのアイデンティティは確立されることはないことに注意が必要である。

第3章 フィクションに基づく客観的研究

以上の論考から、もはや心理学と異領域との差異化の問題は解消されたといえるだろう。しかし、それでもなお、「フィクション（作り話）をテキストとして用いているイカゲンな研究は客観的には成り得ないし、したがってそれは心理学ではない」といった批判が、ナラティブアプローチに対して挙がることも考えられる。

やまだ（2000a, 2000b）は敢えて「人生の実経験とフィクションとしての物語を一緒にしたことに、問題はないだろうか」といった問いを立てた上で、それに対して「新しい物語論では、フィクションか事実か、芸術的か科学的か、口頭で話されたものか書かれたものかを区別しないで、文学も新聞も事務書類も数式も電子メールも、（広義の）言語で語られたものは、すべて『テキスト』と読んで共通の地平に立つことから出発する」と言及している。しかし、これはいわば「異なるスタンスを採る」と表明しているに過ぎず、「そのようなスタンスを採ること自体に問題はないのか」という批判に対する答えにはなっていない。この点は重要なので詳細は改めて論じるとして、ここでは

この問い（批判）に対する答えの要諦のみ示しておく。

従来の心理学では、一般人を対象とした質問紙などによる研究が客観的研究とされる。そして、小説や映画、漫画などはいわばフィクション（作り話）であり事実ではないことから、客観的な研究とは成り得ないと考えてきた。しかし、この批判は外部実在のみを「客観」として捉えているモダニズム的前提に依拠しているといわなくてはならない。

あるテキストが人々に感動を与えるということは、そのテキストに、人の心（感情）を動かす心理的リアリティが凝縮されていると考えることができる。例えば、小説は、読み手がある種の心を読み取ってしまうように、言葉により様々な表現法を駆使し記述されているテキストといえることができる。西條（2002a）の研究は、一般人を対象とした質問紙などから心理的リアリティに迫るのではなく、心理的リアリティが凝縮されているテキストを分析することによって、特定の心理現象を明らかにしようとしたのである。そして実際、西條（2002a）は、「詩人のことばの選択は的確な心理的リアリティに裏打ちされている」という主張（やまだ, 2002a）を、具体的な証拠に基づき示し、さらにそれは人々に感動を与える優れた小説家・俳人・映画家・漫画家等にも当てはまることを示した。

それでもなお、納得し理解しない伝統的な心理学者もいることだろう。しかし、よく考えてみれば、人々に感動を与える心理描写に優れた小説家のテキストに焦点化して分析するよりも、いわば心理描写の素人が書いた自由記述に基づき分析する方が、心理的リアリティを掴めるという伝統的前提自体、慣例（信仰）であることを抜かせば、それほど理論的に正当な根拠はないことがわかるだろう。

第4章 構造・モデルの再構築

以上、構造構成主義を認識論的基盤として、継承という方法論的枠組みに依拠することによって、広義の科学性を確保することが可能となり、異領域との差異化問題が打開可能となることを確認できた。次に、この構造構成主義とモデル構成的現場心理学を融合させ

る作業に移る。まず、本論により再構築された「構造」とは何かを明確化した上で、「モデル」について再考する。なぜなら、佐伯（2000）が、「心理学研究というのは、何らかの心理特性に影響を与える『要因さがし』につきるものではないはずだ。人間とは何か、認識とは何か、判断とは何か……について、何らかの『構造』を持ったモデル（構造モデル）が想定され、それが多様な側面での実験的観察を通して検証されて行くべきものである」と主張しているように、「構造」とは、「モデル構成的現場心理学」（やまだ、1997）の中心概念である「モデル」とも深く関連しているからである。

4-1. 「構造」とは何か？

まず、構造構成主義に依拠した際の「構造」の定義を簡潔に示した上で、それと従来の「命題」、「理論」、「仮説（作業仮説）」といった概念を関連させ、構造構成主義における「構造」の位置付けを明確化する。なお、ここでは命題、理論、仮説といった各概念については適切にまとめられている安田（2001）の論考に基づき論じることとする。まず、構造構成主義における「構造」とは「心理現象をコード化する2つ以上の同一性の関係性から成り立つもの」といえる。そして、「命題」とは「複数の変数の関係を論理的に述べたもの」であるから、これは「構造」という概念に包括される。また、「理論」とは「論理的に整合性のとれた単数、ないし相互に関連する複数の論理的命題のこと」であるから、これもやはり「構造」といえる。また「仮説」とは「理論から論理的に導きださうな命題であり、研究者の検証の対象」であり、作業仮説とは「仮説における命題が含んでいる概念の抽象度を下げ、具体的にその真偽を検証できる内容に表現しなおした言明」といえることから、これらも「構造」ということができる。すなわち、構造構成主義の枠組みによれば、個々の具体的現象に対する「仮説」も、それらにより包括的なものとなった「理論」も同じ「構造」として一元化することが可能となるのである。

さらに、やまだ（2000a, 2000b）によれば、物語とは「2つ以上の出来事（events）をむすびつけて筋立てる行為（emplotting）」と定義されるものであるから、

それによって得られた構造も、それは「命題」（複数の変数の関係を論理的に述べたもの）と同様に、本稿で理論化された「構造」（現象をコード化する2つ以上の同一性の関係性から成り立つもの）に包括される。したがって、構造構成主義における「構造」とは、従来の実証主義的な枠組みと物語論的枠組みの双方を包括する概念であることが確認されたといえよう。

4-2. モデルの定義

次にこの再構築された「構造」の概念に基づき、モデル構成的現場心理学を提唱したやまだの論考（1997）の中心概念である「モデル」の再構築を進めていく。まずモデルの定義に関して、やまだ（1997）は、印東（1973）が定義した「関連ある現象を包括的にまとめ、そこに一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」を採用している。これはモデルの大きな方向性としては的を射たものと思われるが、この定義にはやや曖昧な点があるようにも思える。第一に、「そこに一つのまとまったイメージを与えるようなシステム」の「そこ」とは、「関連ある現象の包括的なまとまり」を指していると考えられるが、一体「何に」関連ある現象を包括的にまとめるのかが不明瞭なのである。研究対象に関連ある現象だろうか？ 研究テーマに関連ある現象だろうか？ 質問項目に関連ある現象だろうか？ この点が不明確なままだと、研究で提起されたモデル化の対象が不明瞭になってしまう。そしてそれは、そのモデルの予測対象の不明確さに直結してくる。

例えば、やまだ（2001a, 2002a）や西條（2002a）の研究は、「生死の境界における天気の話」を構造化したのが、これは「個々人」の心的現象を構造化したものといえる。一方、やまだ等（2001b）の研究は、他界観を文化心理学の対象とみなし、「集団的」民間表象、あるいは共同的想像力の賜としての「この世」と「あの世」のイメージを問題としている。すなわち、両者とも「生と死の境界」といった心的現象に焦点化してはいるが、前者は、「個々人」の心を構造化しており、後者は「集団」の心を構造化しているのである。したがって、それらの構造の予測可能性や再現可能性は、前者では「個々人」の心に対して機能し、後者で

は「集団」の心に対して機能することになる。このように一見同じようにみえる心理現象でも、その構造化の対象が「個々人」なのか、「集団」なのかによってその予測可能性や再現可能性の対象は大きく異なる。したがって、モデルの定義は、モデル化する対象が明確になるものでなくてはならない。

第二の問題点として、「まとまったイメージを与える」という点が挙げられる。やまだ (2002b) は、「まとまったイメージを与えるシステム」として、自然科学では数量的データをもとにした数理モデルが多く用いられてきたと述べているが、「まとまったイメージを与える」だけでは、数理モデルをも含む定義として曖昧すぎるように思われる。心理学には、行動主義、精神物理学、精神生理学、精神免疫学、神経生物学的アプローチ、認知科学的アプローチといった心的現象の中でも確実な側面を対象とする領域がある。したがって、ここでも伝統的数量的研究の結果との知見の摺り合わせを可能とするモデルの定義が求められる。

以上の2点を踏まえれば、「モデル」は「研究対象とする心理的現象を構造化したもの」というように簡潔かつ明確に定義される。この定義によれば、モデル化の対象やその予測対象も明確なものとなる。なお、モデルは「構成されるものであり、構成主体は研究者である」という点では、やまだ (2002b) の見解と一致する。心理的現象を構造化したものをモデルとして提起することによって、ナラティブアプローチによる研究においても、再現可能性、予測可能性、反証可能性、客観深化可能性を確保することが可能となるのは、先に具体的研究例を通して見たとおりである。

4-3. モデルの包括性の問題

また、やまだ (1997) は、「モデルは、概念レベルのものであっても検証可能な形で提起される必要がある。解釈のしかたひとつで何にでも適用可能である代わりに、明確に肯定も否定もできないモデルではなく、限定された領域で、限定された目的に対し、限定された用語で構成される検証可能なモデルこそ、今後の研究に有効である」と述べている。曖昧な記述に終始しかねない質的研究に検討可能な実体を与えようとしたという意味で、この提言の方向性は妥当なものだと思

われる。しかし、構造構成主義においては修正が必要となる。

まず、上に挙げたやまだ (1997) の提言は、モデルは検証可能な「作業仮説」であるべきだという主張に他ならないが、先述したように構造構成主義においては、個々の事象に対する仮説も、包括的な理論も「構造」として一元化される。また、「継承」が「欲望相関性」に基づくことからわかるように、「目的相関性」は構造構成主義全体を支える核心的観点に他ならない。したがって、モデルに関しても、研究対象や目的によって、限定されたモデルの方が有効に機能する場合もあれば、包括度の高いモデルが求められるときもある。したがって、対象限定性がモデルの必要条件とされることはないことになる。そもそも、古典力学に対する相対性理論は、より包括度の高い構造（理論）を提示した良い例であり、このように包括度に秀でたモデルを追求すること自体は妥当なことといえよう。

また既に述べたように、「検証」といった客観主義に基づく方法論は質的研究に適したものではないことから、「検証」は「継承」へと置き換えられる必要がある。

したがって、やまだ (1997) の主張を継承し、修正するとすれば、「他の研究者が継承可能な実体を持つ構造モデルこそ、今後の研究に有効である」となるよう。

第5章 モデル 「構造構成的質的心理学」の堤唱

以上までの議論で、「方法論」であったモデル構成的現場心理学は、「構造構成主義」とそれに基づく方法論を兼ね備えた「理論」へと進化したといえることから、この理論の名称を定めていこう。

その際にはまず、本稿で体系化を進めるにあたり、詩、小説、映画、漫画といった抽象化されたテキストに基づくナラティブ研究（西條、2002b；やまだ、2001、2002a）が用いられたことからわかるように、この理論は、いわゆる「現場（フィールド）」に限定された枠組みではないことを押さえておく必要がある。

これに関しては、やまだ自身（2000a, 2000b）も、「モデル構成によって一般化をめざす方法論（やまだ, 1997）を、ライフストーリー研究はめざすべきではないだろうか」と言及し、その拡張可能性を示唆している。

また、構造構成主義を認識論的基盤とし、それに基づくモデルの定義が「研究対象とする心理的現象を構造化したもの」と修正されたことから、ここでのモデルとは「構造」、あるいは「構造モデル」と置き換える必要がある。それと同時に、モデル構成的現場心理学からの継承性を重んじ、さらに理論名が長過ぎることのないように考慮する必要があると考えた。これらを総合的に考え、この理論を「構造構成的質的心理学」と命名した。

第6章 評価基準 (rigour) の構築

次に、欧米を中心に為されて来た評価基準や一般化といった質的研究に関する基礎付けの議論を参照しつつ、日本の玉石混濁の状況を打開すべく、構造構成的質的心理学における評価基準を整備していく。Flick (1995/2002) によれば、海外では「80年代の半ばから、質的研究を評価する代替えの基準を作るさまざまな試みが行われている」。ここでは多くの質的研究者によって支持されている（岡・Shaw, 2003 予定）、Lincoln と Guba (1985) が提起した trustworthiness（信憑性）と、その下位要素である4つの概念 credibility（信用性）、transferability（転用可能性）、confirmability（確認可能性）、dependability（明解性）を取り上げる必要がある。それを基軸としつつ、構造構成的質的心理学の評価基準について検討する。

なお、これらの概念はその内容からそれぞれの概念間の明確な区別がつきにくく、そのためか既に翻訳されている著書によっても訳出がバラバラで、時には訳が完全に入れ代わっているものさえある（表1参照）。したがって、訳出の問題を検討しつつ⁽¹⁰⁾、各概念について説明する。なぜなら、質的研究の評価にかかわる重要な概念に混乱があることは、質的研究の発展を妨げる可能性があるからだ。なお、これらの概念の詳

細は他の著書（Flick, 1995/2002；Holloway & Wheeler, 1996/2000；Lincoln & Guba, 1985；岡・Shaw, 2003 予定）を参照してもらうこととし、ここでは構造構成的質的心理学に関連する部分を中心に概説するに留める。

6-1. trustworthiness 「信憑性」

まず、中心概念である trustworthiness の訳としては、「信憑性」（岡・Shaw, 2003 予定）を採用した。消去法的に、まず「真実性」（Holloway & Wheeler, 1996：野口等訳, 2000）は客観主義的認識論を彷彿させる訳語のように思われたため採用しなかった。また「信用性」（Flick, 1995：小田等訳, 2002）も不適切のように思えた。なぜなら、竹田（1989）の言及に倣えば、「あなたの言葉を信用します」というときの「信用する」は、自らすすんで（意志によって）信じることを指すことになるが、ここでの trustworthiness とは現象学（竹田, 1989）の信憑に近い概念であり、意志の自由を超えて、つまり、「意識の恣意性をねじふせるように現れてくる『疑い難さ』、あるいは「たしかにそうである」という感覚とともに立ち現れてくる類いのものだと考えたからである。そして、構造構成的質的心理学においても、この意味における「信憑性（trustworthiness）」が評価基準における中心概念となる。

6-2. credibility 「信用可能性」

これに付随する形で、credibility の訳としての「信憑性」（Flick, 1995：小田等訳, 2002）は却下された。また「信用性」（岡・Shaw, 2003 予定）も「信憑性」と若干紛らわしいと考え、「信用可能性」（Holloway & Wheeler, 1996：野口等訳, 2000）という訳語を採用した。Lincoln & Guba (1985) は、信用可能性を高めるための具体的実践として「長期関与」、「持続的観察」、「トライアングレーション」、「仲間報告」、「分析的帰納」、「参加者チェック」といったいくつかの方略を示している。ただし、モデル構造構成的質的心理学においては、研究の信憑性（trustworthiness）は目的との関係性から規定される側面があるので、信用可

表1 評価基準に関する概念の訳出比較

著者・文献	翻訳者	trustworthiness	credibility	transferability	confirmability	dependability
Frick (1995)	小田等 (2002)	信用性	信憑性	転用可能性	確認可能性	確実性
Holloway & Wheeler (1996)	野口等 (2000)	真実性	信用可能性	移転可能性	確認可能性	明解性
岡・Show (2003 予定)	岡 (2003 予定)	信憑性	信用性	移行性	確証性	依存性
本稿	西條	信憑性	信用可能性	転用可能性	確認可能性	明解性

太字=本稿で採用した訳出を示す。

能性を高めるとされる上記の方略が、研究目的と関係なく信憑性 (trustworthiness) に寄与するとは考えてはならないことに注意する必要がある。

6-3. transferability 「転用可能性」

transferability の訳については、読み手が当該の知見を他の現象に「転用」できる可能性を示すものと捉え、「転用可能性」(Flick, 1995 : 小田等訳, 2002) を採用した。なお、これを発展させることによって、質的心理学に適した新たな一般化へとつながる可能性があることから、次章の一般化の議論で改めて論じることとする。

6-4. confirmability 「確認可能性」

また、confirmability については、「監査」との関連で論じられることが多い (Flick, 1995 : 小田等訳, 2002 ; 岡・Shaw, 2003 予定) ので、「(事実) 確認可能性」とした。ただし、監査のところ而言及するように、構造構成的質的心理学においては、「本当か (事実であるか) どうか」を確認することが、必ずしも信憑性 (trustworthiness) につながらないことに留意する必要がある。

6-5. dependability 「明解性」

dependability とは、「当てにできるかどうか」のことである (Flick, 1995 : 小田等訳, 2002) が、本稿では「説明内容からみて明解性とした」野口等 (2000 :

Holloway & Wheeler, 1996) の訳が適切だと考え、「明解性」という訳を採用した。これは構造構成的質的心理学においても重要な概念となるが、「明解性という考え方は、明らかに決定に至るあしあとという Sandelowski (1986) の概念に応じたものである」ことから、次節において詳述する。なお、「決定に至るあしあと」とは decision trail の訳であるが、その内容は「読者が研究の理論と発展の道筋を理解するのを助けるような、その研究者の考えと行動のプロセスの詳しい説明」(野口, 2000 : Holloway & Wheeler, 1996) といった意味であることから、以下「決定に至る軌跡」と訳出することとする。

6-6. 「決定に至る軌跡」から「構造化に至る軌跡」

へ

Holloway と Wheeler (1996/2000) は、「質的研究において真実性を確立するために必要なこれら 4 つの要素は、研究を計画し実施する際に理論的な背景となる」としながらも、Sandelowski (1986) が提唱した「決定に至る軌跡 (decision trail)」という概念を強く支持し、以下のように述べている。

さらに、私たちは「決定に至るあしあと (軌跡)」という非常に重要な概念を支持している。この概念によって、研究者はその研究を吟味することができ、また読み手は研究プロセスで下されてきた決定を理解することができる。「決定に至るあしあと (軌跡)」は、質的研究の厳密さを確立し、研究全体を評価するための方法となっている。

(() 内は筆者による加筆)

現象の曖昧な側面を扱うことに宿命づけられた^{モデル}構造構成的質的心理学において、原理的思考を徹底した際に残る厳密さの基準としては、決定に至る軌跡を残すということに尽きるといえるだろう。構造構成主義においては、「決定」とは「構造化」に他ならないことから、「決定に至る軌跡」ではなく「構造化に至る軌跡」(construction trail)を残すことが求められることになる。これによって、1章で示したように反証可能性を確保することにもなるのである。

また、「監査」(Lincoln & Guba, 1985)の実行可能性(「監査のための軌跡(audit trail)」)を残すことにもつながってくるが、これに関しては、徹底した原理的思考による基礎付けの際には、蛇足といわなくてはならない。なぜなら、監査とは「そもそも会計分野で帳簿の監査の意味で使われる」(Flick, 1995/2002)ものであることからわかるように、その知見の「真偽」こそが主たる問題になる状況(例えば、裁判の資料となる時など)において限定的に意味を持つ営為だからだ⁽¹⁾。

第7章 構造モデルに依拠した新たな一般化

7-1. 従来の質的研究における一般化の議論

次に質的研究の基礎付けとして、重要な概念の一つである「一般化(generalization)」の問題を考えていこう。これは「研究で得られた概念やパターンがどれだけ一般化できるかという意味」(Flick, 1995/2002)である。時折一般化の問題に対して、理論的防御策として原理的な一般化不可能性を掲げる人もみられるが、いつまでも原理的な「不可能性」などに安住していても、建設的な議論にはならないだろう。実際、従来の質的研究においてもこの問題は検討されてこなかったわけではない。たとえば、FieldとMorse(1985)は、研究参加者の特徴や状況を述べるのが有効であると、サンプリング方法の洗練をその打開の道として示唆した。これはグランデッドセオリーにおける理論的サンプリングとも通じるものといえるだろう。しかし、

HollowayとWheeler(1996/2000)は「質的研究ではこういった対象選択が適切であるが、そのまま結果を一般化したり、ほかに移転(転用)して適用することはできない」(()内は筆者による加筆)と対象選択に依る限界を指摘している。

他のタイプとして、グランデッドセオリーにおける「継続的比較法(the constant comparative method)」という方法が挙げられよう。継続的比較法とは、コード化された結果を、既に行われたコード化や分類と継続的に比較する方法である。これはさらなる体系化が進められ、Gerhardt(1988)は「理念型形成」といったより一貫性のある方法論を提起した。この方法は(1)個々の事例を再構成し、(2)事例間比較を行い、(3)事例間をまとめるタイプ形成を行い、(4)典型的な事例を抽出する。(5)この理念系を反映した事例を基準に、個々の事例の理解を行い、さらに(6)個々の事例を超えた構造を得るといったものだ。

こういった論考を踏まえてFlick(1995/2002)は「質的研究における一般化とは、事例研究やその文脈から得た知見を、より一般的で抽象的なパターン(たとえばタイプロジー)へと少しずつ移し変えていくことである」と結論づけている。これは多様な事例からボトムアップにより多くのケースに適用可能な構造を提起するという意味で重要な提言である。しかしながら、(A)「理論的サンプリング」と(B)「継続的比較」と「理念的形成」は、構造構成的質的心理学における(A)「構造化に至る軌跡」と(B)「構造化」に対応するものではあるが、残念ながらそれ以上のものではない。すなわち、これらは信憑性ある構造を提起する方法といった点で、一般化の前提の議論としては重要だが、質的研究に適した新たな一般化への道を開くには至ってはいないのである。

一方、HollowayとWheeler(1996/2000)は、この一般化の問題に対して「研究者の役割は、決定に至るあしあと(軌跡)が明確かつ内容豊かであることを確保することによって移転(転用)可能性の検討を助けることができる」(()内は筆者による加筆)と述べており、これは読み手と書き手の相互作用を前提とした転用可能性の方向性としての的を射た見解のように思われる。しかしながら、そのために示された具体的方法は、決定(構造化)に至る軌跡を示すべきであると

いったものに過ぎず、新たな一般化の枠組みとしては、理論的に十分なものではない。

これに関連して、最近では、やまだ（2002b）がもう一步踏み込んだ議論をしている。そこでは、「あらゆる現象に適用できる代わりに現実とは乖離する抽象的モデルではなく、また無限に多様な具体的現実を個々の写實的に写し取る具象モデルではなく、具体的現象をできるだけ単純化しながら具体性を保持するための必要最小限の有意義情報を含むモデル」である「半具象化モデル」を提起している。半具象化モデルは、構造構成的質的心理学でいう、「構造モデル」に対応するものに他ならないが、特筆すべきは、半具象化モデルの特徴として「イメージからイメージへの比喩的移行や生成的増殖を生みやすいことにある」と言及している点にある。これはおそらく一般に認められている以上に、有意義な提言といわなくてはならない。なぜなら、この提言はミメシスという概念を基軸とした新たな一般化への道へとつながるものと考えられるからだ。

7-2. ミメシスによる理論化

Flick（1995/2002）によれば、ミメシス（mimesis）とは「世界を象徴的世界へと変換すること」である。彼は、ミメシスに対する Ricoeur の考察を質的研究に援用し、「質的研究に当てはめて考えると、（ある主体、相互行為あるいは出来事に関する）テキストが作成される際、このテキストの中の現実構築にその著者ばかりではなくそれを読み解釈する読者も関わっている」と主張している。これは質的研究が書き手と読み手の相互作用を基軸とするダイナミックなプロセスであることを意味する。次に、このミメシスという概念を基盤として「アナロジー的思考」という認知科学的知見に基づき更なる理論化を進める。

7-3. アナロジー的思考による一般化

アナロジーとは、既知のパターンに簡単には一致しないような未知の状況に直面した場合、新奇の事態を、すでに知っていることがらに置き換えて理解しようと

する時の、心の飛躍のことであり、これが機能するための3つの原則が認知科学的知見として明らかにされている（Holyoak & Thagard, 1995/1998）。

テキストを、アナロジー利用の原則に基づく一般化を促進するものにするためには、アナロジーを行う妥当性を得るために、「類似性の制約」を満たす必要がある。そのためには、構造構成的質的心理学においては「構造化に至る軌跡」を明示的に残すのみならず、岡と Shaw（2003 予定）が「転用可能性」を確保する具体的方法として挙げているように、十分に状況（文脈）を記述する「厚い記述」（Geertz, 1973/1987）が必要になる。すなわち、読み手がそれらの類似性を十分確認可能な程の豊かな情報を記述する必要があるのである。

次に、「構造の制約」を満たすことが求められるが、これは「構造」を方法論の中心概念とする、構造構成的質的心理学だからこそ満たすことができる制約である。そのためには、なじみ深い領域（ベース）と新たに理解しようとする領域（ターゲット）の間に、一貫した構造上の相似関係を見出しやすいようにする必要があるのである（Holyoak & Thagard, 1995/1998）。具体的には、ベースとターゲット間のシステムレベルでの比較が行えるよう、知識を明示的に表象するのが有効であり、特に実際構成された多くのアナロジーは図示されているという認知科学的知見（Holyoak & Thagard, 1995/1998）に注目すると、心的現象を構造化したモデルを、できる限り明示的に図示することが重要となる。

構造構成的質的心理学の枠組みに依拠した上で、このミメシスという概念を基盤とし、人間の持っている「アナロジー的思考」を理論的に組み込むことによって、「転用可能性」や「半具象モデル」といった概念をさらに展開し、書き手と読み手の相互作用を基軸とした新たな一般化の枠組みが確立可能となるのである。これによって、従来「数の多さ」に依拠する一般化の枠組みを脱却しきれなかったために、常に事例数の少なさを取りざたされ、その知見を正当に評価されることがなかった質的研究に、構造の「質」を基軸とする新たな活路を見出すことになるだろう。

第8章 モデル 構造構成的質的心理学のモデル提示

8-1. 定義

以上体系化をすすめてきた「構造構成的質的心理学」を構造モデルとして提示した上で(図1), その意義等について総括する。

構造構成的質の心理学とは、「質的アプローチを中心に心理的現象を構造化し, 信憑性のある構造モデルを追求するという要請(公理)に基づく理論」と定義されるものである。

8-2. 構造構成主義の有効性と理論的頑健さ

まず, 超認識論として位置付けられた構造主義科学論は, 疑い切れない独我論的前提を戦略的出発点として構築された哲学的解明の理論なので原理的には誰もが納得了解する可能性を持っている。そのため, より広範な研究者に受容される可能性があるといえよう。

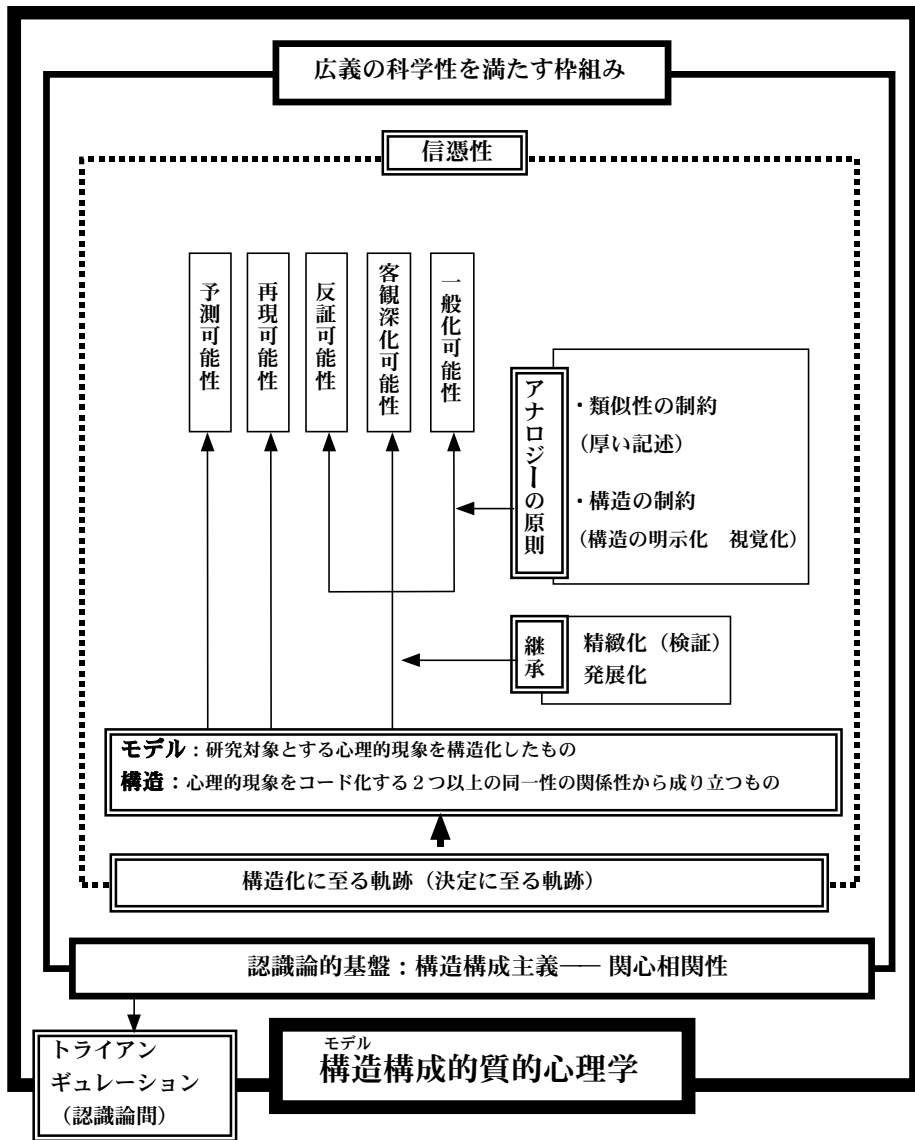
また, この理論は多くの質的研究の認識論的基盤となってきた社会構築主義を否定するものではない。むしろ従来の社会構築主義は, 相対主義との批判を受けることは少なくない(浅野, 2001; 千田, 2001; Gergen, 1994/1998; 西條, 2002b; 上野, 2001)が, 構造構成主義の枠組みにおいて活用されることによって, その有効性を減じることなく, 相対主義との批判のみを理論的に回避可能となるのである。すなわち, 社会構築主義を認識論的基盤とする, フィールドワーク, 解釈学的アプローチ, エスノメソドロジー, ナラティブアプローチ, ライフストーリー, アクションリサーチ等々の多種多様な質的アプローチを構造構成的質の心理学というハード(理論)において使用することによって, 理論的に頑健なソフトとしてその性能を十分に発揮することが可能となるのである。

さらに, 従来の「方法論的折衷主義」は, 認識論を考慮せずに「思い付いたまま色々な方法をテキトウに使ってみました」というものであったため, 矛盾した結果が得られたときにはテキトウにお茶を濁すしかなかった。しかし, この理論は, 通常認識論の一段上位に位置づく超認識論(構造構成主義)を認識論的基

盤とするため, 客観主義, 社会構築主義といった従来の認識論を, メタ理論的枠組みとして扱うことができることから, 関心相關的にそれらを柔軟に選択することが可能となった。すなわち, 「心理的現象の曖昧な側面を捉えるために, 戦略的に社会構築主義的なメタ理論的枠組みを採用し, 心理的現象の確実な側面を捉えるために, 戦略的に客観主義的なメタ理論的枠組みを採用する」といったように関心相関性を基軸とした「方法論的多元主義」へと進化することができたのである。これによって, 例えば, ある心理的現象の曖昧な側面を捉えようとした時, 現実を社会的に構築されたものとして捉えるといった前提に基づく社会構築主義は, 有効なメタ理論的枠組みとして機能するし, 他方その確実な側面を捉えようとした時, 一つの外部的実在を仮定する客観主義は, 有効なメタ理論的枠組みとして機能することになる。

これは, 従来では理論的矛盾を抱えていた異なる認識論(パラダイム)間に依拠したトライアングレーションの理論的基盤を整備したことを意味する。具体的には上述したトライアングレーションにおいて, 一見矛盾する結果が得られた場合でも, それらは既に矛盾ではなくなる。すなわち「(A)というメタ理論的枠組みに依拠して検討した結果(A')にみえ, (B)というメタ理論的枠組みに依拠して検討した結果(B')にみえた」といったように「全体」として現象を捉えることが理論的に可能となるのである⁽¹²⁾。これによって, 変化を変化として捉える枠組みである, ダイナミックシステムズアプローチ(Smith & Thelen, 1993; 西條, 2002c; Thelen & Smith, 1994, 1998)とナラティブアプローチといった最新のアプローチ間のトライアングレーションによる発達研究すら可能となるのである。

なお, 先述したように認識論的基盤に位置付けた構造主義科学論は, 構造構成主義といった方がその内容を端的に表していることからわかるように, Lévi-Strauss に代表される「構造主義」とは明らかに異なる立場である。渡邊(1994)によれば, 構造主義がRicoeurをはじめとする, ポスト構造主義に批判された論点は, 『無意識的』な, 『客観的』な, 『観察者から独立』した構造の確認に終始するのであり, 構造が



(注) 部は方法論的概念を示す

図1 体系化された「^{モデル}構造構成的質的心理学」の構造モデル

主体的解釈と媒介される場面を知らない」といった「主体性の欠如」にある。それゆえそこでの構造は Piaget (1968/1970) が批判するように静態的なものとなる。それに対して、構造主義科学論は、主体が構造を構成するという意味でダイナミックな前提に依拠しており、そういった批判は該当しないのである。そして、構造構成主義は、「構造主義と構成主義との間の不可分な関係」を強調する点で、Piaget (1968/1970, 1970/1972) の見解を支持し、同時に Piaget の残した成果によって支持されるものであることから、Piaget は構造構成主義の先駆者として位置づけられよう。

8-3. 方法論的枠組みの発展

「構造」とは、「心理現象をコード化する 2 つ以上の同一性の関係性から成り立つもの」と定義される。この定義によって「仮説」から「理論」「物語」まで一元的に包括可能となる。また「モデル」とは「研究対象とする心理的現象を構造化したもの」と定義される。構造モデルを方法論の中核に据え、「構造化に至る軌跡」を明記しつつ、継承することによって、質としての利点を失うことなく、予測可能性、再現可能性、反証可能性、客観深化可能性といった広義の科学性を確保することが可能となった。

また、研究で提起された構造モデルの妥当性は、読み手に「たしかにそうである」といった「信憑性」を取り憑かせることができるか否かにかかっており、それは「構造化に至る軌跡」を明示的に残していくことによって保証される。さらに、アナロジーの原則を活用することによって、書き手と読み手の相互作用を基軸とし、構造の「質」に依拠する次世代の一般化が可能となったといえよう。なお、これは従来一般化の枠組みを否定するものではない。そうではなく数量に依拠する従来一般化のモードに加え、質を基盤とする新たな一般化のモードを増やしたことに他ならない。

8-4. 質的心理学のアイデンティティの確立

この理論は、社会構築主義を認識論とする通常の「質的研究」と異なり広義の科学性を保証する理論であることから、「質的心理学」のアイデンティティ（同

一性）に成り得る可能性を持っている。それによって異領域の質的アプローチや数量的アプローチと学融的に知識生産することも可能になるだろう。この点に関しては更なる議論が必要だが、少なくとも現時点で「質的心理学とは何か」という問いに対する回答として最も妥当なもの 1 つということではできよう。

8-5. 和製理論の意義

構造構成的質的心理学は、やまだ (1997) の構築した方法論を継承し、池田 (1990) が構築した構造主義科学論といった科学論を援用して認識論的基盤を整備した上で、さらなる理論的補強を施した和製理論といえる。そして以上でみてきたように、この理論は、欧米を中心に提案されてきた質的研究の枠組み（評価基準、基礎付け、一般化）と比較しても、理論的に凌駕する独自性と頑健性を持っている。これまで、日本の心理学は何かにつけて海外の後塵を拝してきた。そのため、残念ながら、現時点で日本の心理学が消滅しても、アカデミックレベルでは、世界の心理学には何ら影響がないといっても過言ではない状況にある。欧米と日本といった二項対立を主張するつもりは毛頭ないが、欧米にとっても意義ある（欧米にはみられない）独自の理論的立場を確立し、有意義な知見を積み上げることによって、初めて対等な立場で建設的な議論が可能となり、それによってこそ世界の心理学・質的研究に貢献可能となるだろう。

8-6. 継承発展の必要性

ただし、限られた紙面の中で、もとより筆者の能力に余る仕事を手掛けたことから、本稿で体系化された理論には、不十分な議論も多くあることだろう。時期尚早の感は否めないが、今や継承という関係性に開かれた方法論的概念があることから、不十分さを怖れて遅々として進まないよりも、大胆に前進し、叩き台になる道を選んだ。本稿で提起された構造構成的質的心理学も、理論的に構造化されたモデルに他ならないことから、様々な人に継承され、修正・補強・洗練され続けることに期待したい。

終章 質的心理学のさらなる発展に向けて

人々の中で、ある思想や方法論が生き延びるか否かは、概してその理論的正しさではなく、その思想（方法論）が生み出す「現実」それ自体に依っている（竹田，1987）。したがって、質的心理学が生き延びるか否かも、結局は生み出される研究がもたらすものそれ自体に依るといえることから、今後、より多くの質的研究が、有益な知見を生み出して行くことが質的心理学の継続的發展に不可欠だろう。そして、そのためには同時に、非建設的議論を回避し、質の長所を活かした質の高い研究を安定して生産するための、本稿のような質的心理学の枠組み自体を整備する研究も、また不可欠といえよう。

しかしながら、有益な知見や緻密な理論も重要だが、それを生み出すのは「人」であり、そして人の「心」を動かし、次世代を創るのは、「高き志」であるということも忘れてはならないだろう。我が国で『質的心理学研究』という査読付きのジャーナルが創刊され、様々なオリジナリティある研究が生み出されつつあり、そして構造構成的質的心理学といった本邦独自の理論が体系化された。今こそ、独自の理論体系・知見を引き下げて海外に進出し、世界の心理学・質的研究に貢献するといった「高き志」のもとに邁進すべきだと思われる。さすれば、質的研究の継続的發展などは自ずと達成されることだろう。

脚注

- 1 これに類似した立場として構成主義（constructivism）といった立場があり、それらは似て非なる立場といえる（菅村，2002 投稿中）。しかし、日本では構成主義（constructivism）は社会構築主義（constructionism）と混同されて扱われることも多く、適切な理解のもとにはほとんど普及していないことを考慮し、本稿では社会構築主義を中心に論じていく。また、社会構築主義にも様々な立場がある（浅野，2001；Gergen，1994/1998；中河，1999；上野，2001）ことを知らないわけではないが、本稿ではその立場を緩やかに定義して、議論を建設的に進める。
- 2 質的研究をどの範囲まで含むものとして捉えるかは議

論が分かれている。岡と Shaw（2003 予定）は、より広義に質的研究の哲学的背景を捉え、それらは実証主義（positivism）、ポスト実証主義（postpositivism）、批判理論（critical theory）、構成主義（constructivism）を挙げている。これは数量化しない研究スタイルが古くから脈々と続いてきたことを考えれば、より包括的な捉え方だと思われる。しかし、現在、人文・社会科学領域に横断的に浸透しつつある「質的研究」は、ポストモダニズムといった思想的潮流の影響を受けたものといえることから、本稿では実証主義などは含めなかった。

- 3 竹田（1987）は、Descartes の論考が現在からみれば全く合理的ではないことを指しつつ、「思想にとって、あとから振り返って出てくるそういう限界は、原理的で宿命的なものだ。わたしたちはむしろ、そういった思想家の理路それ自体より、それを通して浮かんでくる彼の世界に対する態度のありようを、つねに汲み取るように心掛けるべきなのである」と述べている。心理学においても過去の仕事を、その内容が十分ではないという理由で批判することはたやすいことであり、原理的にはいかなる仕事に対しても可能である。しかし、その仕事の「意味」を理解するためには、その仕事が為された背景・状況を鑑み、その仕事はその時点においていかなる意味を持っていたのか、そしてその人は何を志したのかを汲み取るように心掛けなければならない。さもなければ、非生産的な揚げ足取りにしかならないだろう。
- 4 ここに限らず、本稿で想定している疑問や批判は、実際に各種研究会や学会で話題提供した際に、提出された意見に基づいている。
- 5 「似たような語に『学際』があるが、学際は問題は同一でも解が共有されない共同研究志向であり、学融の場合には、何よりも問題解決を共有するために異なる学範の立場の者が協同作業を行なう、という違いがある」（サトウ，2002a）。
- 6 ナラティブアプローチについては、本稿では具体的研究例として挙げるに過ぎない。したがって、その詳細なレビューについては、やまだ（2000a，2000b）、徳田（2001）、浅野（2001）の論考を参照のこと。なお、斎藤（2003 予定）によれば、「ナラティブ（narrative）とストーリー（story）は一般に互換的な言葉であり、全く同じ意味として用いられることが多いが、ナラティブという用語は物語りの内容を指すとともに、物語りの構造を意味することもあるが、ストーリーは物語りの構造を示すことはない」。したがって、本稿では構造が中核概念となるため、物語論に基づく研究をライフストーリー研究ではなく、ナラティブ研究と総称した。

- 7 ここでいう同一性とは, Saussure (1916/1972) のいう, シニフィエのことである。コトバ (シーニュ) はシニフィエ (同一性) とシニフィアンからなり, 例えば, 「犬」というコトバ (シーニュ) は, 我々の共通理解を可能とするそれらが示す何らかのシニフィエ (同一性) と, 「犬」とか「イヌ」とか「いぬ」といった文字あるいは inu というシニフィアン (音声) から成り立っている (丸山, 1983)。
- 8 これら3つは, 科学的営為を可能とするための「前提条件」として用いられているのであり, 決して「科学の根拠となる根源概念」や「科学の妥当性の絶対的根拠」「科学成立の絶対的起源」といったものではないことには厳戒を要する。そのようなものとして捉えたと (誤解すると), 絶対的な根源や起源といえるようなものの存在不可能性を謳う Derrida 的な形而上学批判の対象となってしまう。しかし, この3つはあくまでも, 「科学的営為成立の条件」であり, 形而上学的批判は当たらない。
- 9 個人的に, 「従来の検証にも発展的側面は備えられている」との指摘を頂いたが, そもそも多様な解釈が可能なテキストに対して, その真偽を「検証」しようとする枠組みはやはり根本的に適さないといえる。
- 10 言うまでもなく, ここで採用された訳出は一提案に過ぎず, 本誌を媒体として今後も更なる検討が加えられるべきだろう。また, 近年質的研究に関する翻訳本が出版されつつあることから, 訳出の問題を検討することも, 本誌の重要な役割と考える。早い時期にそのような特集を組むことは, 国内の質的研究の発展に寄与することになるだろう。
- 11 Lincoln と Guba は, 社会構築主義を徹底し, 最もラディカルな相対主義寄りの立場を取った (岡・Shaw, 2003 予定)。相対主義寄りの立場を採ることと, 「監査」といった「本当か否か」を確認する枠組みに固執したことは一見矛盾しているようにもみえるが, ポストモダニズムの思潮は, 暗黙の前提として客観主義や形而上学的思考といったモダニズムの前提をその根底に抱えている (竹田, 1987) といったことを考えれば, さほど不思議なことではないように思われる。社会構築主義にみられるようなニヒリズムやペシニズムは「時代や文化を超えて妥当な解釈へと到るべきである」という「意味」を探し求め, しかし逆にその不可能性を見出したところから現れたものに他ならない (竹田, 2001) からだ。
- 12 これに対して, 「そんないい加減なことでもいいのか? どちらが正しいか決めなくては」と思った方がいたら, まだ「真実の一つ」という客観主義的前提から抜けきれていないことに気付く好機である。

付記

清水武氏, 菅村玄二氏, 荘島宏二郎氏には, それぞれの専門的観点から多大な影響を受けており, 本稿の執筆にあたっては, その潜在的な影響力は計り知れない。この3名の朋友に心より感謝します。また個人的, あるいは公の場において, 様々な批判, 質問をして下さった皆さんにも感謝致します。最後に, 厳しくも的確な助言を下さった本誌編集委員と査読者の皆様に厚く御礼申し上げます。

文献

- 浅野智彦. (2001). 自己への物語論的接近. 東京: 勁草書房.
- Bruner, E.M. (1998). 可能世界の心理. (田中一郎, 訳). 東京: みずす書房. (Bruner, E.M. (1986). *Actual minds, possible world*. Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- Bryman, A. (1988). *Quality and quality in social research*. London: Unwin Hyman.
- 千田有紀. (2001). 序章: 構築主義の系譜学. 上野千鶴子 (編), 構築主義とは何か (pp.1-41). 東京: 勁草書房.
- Denzin, N. K. (1989). *The research act: A theoretical introduction to sociological methods* (3rd ed.). Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall.
- Derrida, J. (1972). 根源の彼方に: グラマトロジーについて (上). (足立和浩, 訳). 東京: 現代思潮社. (Derrida, J. (1967). *De la grammatologie: Minuit*. Paris: Les Editions de Minuit.)
- Derrida, J. (1972). 根源の彼方に: グラマトロジーについて (下). (足立和浩, 訳). 東京: 現代思潮社. (Derrida, J. (1967). *De la grammatologie: Minuit*. Paris: Les Editions de Minuit.)
- Field, P.A., & Morse, J.M. (1985). *Nursing research: The application of qualitative approaches*. London: Groom.
- Flick, U. (2002). 質的研究入門: 〈人間科学〉のための方法論. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- Geertz, C. (1987a). 文化の解釈学 1. (吉田偵吾, 柳川啓一, 中牧弘允, 板橋作美, 訳). 東京: 岩波書店. (Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books.)

- Geertz, C. (1987b). 文化の解釈学 2. (吉田偵吾, 柳川啓一, 中牧弘允, 板橋作美, 訳). 東京: 岩波書店. (Geertz, C. (1973). *The interpretation of cultures*. New York: Basic Books.)
- Gerhardt, U. (1988). Qualitative sociology in the Federal Republic of German. *Qualitative Sociology*, 11, 29-43.
- Gergen, K. J. (1998). もう一つの社会心理学: 社会行動の転換に向けて. (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀, 監訳). 京都: ナカニシヤ出版. (Gergen, K. J. (1994). *Toward transformation in social knowledge* (2nd ed.). New York: Springer Publishing Company.)
- Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartznan, S., Scott, P., & Trow, M. (1997). 現代社会と知の創造: モード論とは何か. (小林信一, 監訳). 東京: 丸善. (Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartznan, S., Scott, P., & Trow, M. (1994). *The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary society*. Thousand Oak CA: Sag.)
- Hammersley, M. (1992). *What's wrong with ethnography?* London: Routledge.
- Holloway, I., & Wheeler, S. (2000). ナースのための質的研究入門: 研究方法から論文作成まで. (野口美和子, 監訳). 東京: 医学書院. (Holloway, I & Wheeler, S. (1996). *Qualitative research for nurses*. Malden: Blackwell Science Ltd.)
- Holyoak, K. J., & Thagard, P. (1998). アナロジーの力: 認知科学の新しい探究. (鈴木宏昭・河原哲雄, 監訳). 東京: 新曜社. (Holyoak, K. J., & Thagard, P. (1995). *Mental leaps: Analogy in Creative Thought*. London: MIT.)
- 伊藤哲司. (2001). ハノイの路地: エスノエッセイと映像. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学 (pp. 172-179). 東京: 金子書房.
- 池田清彦. (1990). 構造主義科学論の冒険. 東京: 毎日新聞社.
- 印東太郎. (1973). 心理学におけるモデル構成: 意義・展望・概説. 印東太郎 (編), 心理学研究法 17: モデル構成 (pp.1-28). 東京: 東京大学出版会.
- Lincoln, Y. S., & Guba, E. G. (1985). *Naturalistic Inquiry*. London: Sage.
- 丸山圭三郎. (1983). ソシユールを読む. 東京: 岩波書店.
- Melia, K. (2000). 本書の出版に寄せて. Holloway, I., & Wheeler, S. (Eds.). ナースのための質的研究入門: 研究方法から論文作成まで. (野口美和子, 監訳). 東京: 医学書院. (Holloway, I., & Wheeler, S. (1996). *Qualitative research for nurses*. Malden: Blackwell Science Ltd.)
- 南博文. (1991). 事例研究における厳密性と妥当性: 鯨岡論文 (1991) を受けて. 発達心理学研究, 2, 46-47.
- 無藤 隆. (2002). 編集後記: 質的研究への参加を促すために. 質的心理学研究, 1, 163. 東京: 新曜社.
- 中河伸俊. (1999). 社会問題の社会学: 構築主義アプローチの新展開. 京都: 世界思想社.
- 中島義明. (編者代表). (1999). 心理学辞典. 東京: 有斐閣.
- 西 研. (2001). 哲学的思考: フッサール現象学の核心. 東京: 筑摩書房.
- 小田博志. (2002). 解説. 質的研究入門: 〈人間科学〉のための方法論. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- 岡 知史・Shaw, I. (2003 予定). 質的研究調査法. 久田則夫 (編), 社会福祉の研究入門. 東京: 中央法規出版.
- Piaget, J. (1970). 構造主義 (滝沢武久・佐々木明, 訳). 東京: 白水社. (Piaget, J. (1968). *Le structuralisme*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- Piaget, J. (1972). 発生的認識論 (滝沢武久・佐々木明, 訳). 東京: 白水社. (Piaget, J. (1972). *L'epistemologie genetique*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- 佐伯 胖. (2000). 序: 実践としての統計学. 佐伯胖・松原望 (編), 実践としての統計学 (pp.1-11). 東京: 東京大学出版会.
- 西條剛央. (2002a). 生死の境界と「自然・天気・季節」の語り: 「仮説継承型ライフストーリー研究」のモデル提示. 質的心理学研究, 1, 55-69. 東京: 新曜社.
- 西條剛央. (2002b). 人間科学の再構築 I: 人間科学の危機. ヒューマンサイエンスリサーチ, 11, 175-194.
- 西條剛央. (2002c). 母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究: ダイナミックシステムズアプローチの適用. 発達心理学研究, 13, 97-108.
- 斎藤清二. (2003 予定). 第1章: ナラティブ・ベイスド・メディスンとは何か. 斎藤清二・岸本寛史 (編著), ナラティブ・ベイスド・メディスンの実践 (頁未定). 東京: 金剛出版.
- サトウタツヤ. (2002a). 21 世紀の教育心理学: 「教育心理学の不毛性議論」に触発されつつ. 教育心理学年報, 41, 139-156.

- 佐藤達哉. (2002b). モードII・現場心理学・質的研究：心理学にとっての起爆力. 下山晴彦・子安増生 (編), 心理学の新しいかたち：方法への意識 (pp.173-212). 東京：誠信書房.
- Sandelowski, M. (1986). The problem of rigor in qualitative research. *Advances in nursing science*, 8, 27-37.
- Saussure, F. (1972). 一般言語学講義. (小林英夫, 訳). 東京：岩波書店. (Saussure, F. (1916). *Cours de linguistique generale*.)
- Smith, L. B., & Thelen, E. (Eds.). (1993). *A dynamic systems approach to development: Applications*. Cambridge: MIT Press.
- Silverman, D. (1993). *Interpreting qualitative data*. London: Sage.
- 菅村玄二. (2002 印刷中). クライアント中心療法における変化のプロセスの再考：構成主義の立場から. 理論心理学研究, 4.
- 菅村玄二. (2002 投稿中). 構成主義序説.
- 菅村玄二・春木豊. (2001). 人間科学のメタ理論. ヒューマンサイエンスリサーチ, 10, 287-299.
- 竹田青嗣. (1987). 現代思想の冒険. 東京：毎日新聞社.
- 竹田青嗣. (1989). 現象学入門. 東京：NHK ブックス.
- 竹田青嗣. (1995). ハイデガー入門. 東京：講談社.
- 竹田青嗣. (2001). 言語論的思考へ：脱構築と現象学. 東京：径書房.
- Thelen, E., & Smith, L. B. (1994). *A dynamic systems approach to the development of cognition and action*. Cambridge: MIT Press.
- Thelen, E., & Smith, L. B. (1998). Dynamic systems theories. In R. M. Lerner (Ed.), *Handbook of child psychology: Vol.1* (pp.563-634). New York: John Wiley & Sons, Inc.
- 徳田治子. (2001). 「生きる意味」の心理学：ナラティブ・アプローチの成果と課題. 人間文化論叢, 3, 123-131.
- 上野千鶴子 (編). (2001). 構築主義とは何か. 東京：勁草書房.
- 渡邊二郎. (1994). 構造と解釈. 東京：筑摩書房.
- 渡邊芳之. (1997). メタファーとしての「こころ」：心的概念が意味しているもの. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 4, 75-82.
- 渡邊芳之. (2000). 心理学論鼎談：後編. サトウタツヤ, 渡邊芳之, 尾見康博 (編), 心理学論誕生：心理学のフィールドワーク. 京都：北大路書房.
- 山田洋子. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51.
- やまだようこ. (1995). 理論研究をまとめるために. 発達心理学研究, 6, 72-74.
- やまだようこ. (1997). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. やまだようこ (編), 現場心理学の発想 (pp.161-186). 東京：新曜社.
- やまだようこ. (2000a). 人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か? 教育心理学年報, 39, 146-161.
- やまだようこ (編). (2000b). 人生を物語る：生成のライフストーリー. 京都：ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2001a). いのちと人生の物語：生死の境界と天気の話. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学 (pp.4-11). 東京：金子書房.
- やまだようこ (研究代表者). (2001b). 日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究. 科学研究費研究成果報告書.
- やまだようこ. (2002a). なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか?：質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承のサイクル. 質的心理学研究, 1, 70-87. 東京：新曜社.
- やまだようこ. (2002b). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図象モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128. 東京：新曜社.
- やまだようこ. (2002c). 編集後記：共同生成の場. 質的心理学研究, 1, 164-165. 東京：新曜社.
- 矢守克也. (2001). 災害体験の記憶と伝達. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学 (pp.112-119). 東京：金子書房.
- 安田 雪. (2001). 実践ネットワーク分析：関係を解く理論と技法. 東京：新曜社.

(2002.6.30 受稿, 2003.1.8 受理)